

沖縄県国頭郡大宜味村津波方言

林 由華

項目		基本情報
話者 情報	生年	1931年
	生育地	沖縄県国頭郡大宜味村津波
	性別	男
	補足情報	津波在住は18歳まで。その後は、首里、アメリカ、大阪、奈良。
解説	概要	<p>北琉球、奄美南部・沖縄北部方言の一部。そのうち沖縄北部方言に属するが、この沖縄北部方言は山原（やんばる）方言とも呼ばれる。山原方言は、八行子音のp音を（[p]もしくは[φ]）で残していることや、語頭のk音がh音になっていること（北山原）で知られている。津波方言もp音を残し、また一部の語頭のk音がh音になっている（例、項目38 hasa「傘」）。</p> <p>話者は18歳で土地を離れており、それ以降津波方言に起こった言語変化（特に首里・那覇方言）の影響をうけていない。このため、帰郷した際には、「古い津波方言を話している」と言われることがある。例えば、「食べる」は以前 keen で、本話者はその形を使うが、既に現地では kamyun（中南部方言と同形）を使っているとのこと。また、土地を離れてからは日常的に津波方言を使用していないため、思い出せない表現や語彙があることもある。</p>
	表記	<ul style="list-style-type: none"> ・いわゆる喉頭化音には「'」をそのカナの前に付す（例：'やー[j'a:]「おまえ」）。喉頭化音はヤ行（'やー、'ゆー）、ワ行（'わー）のみで確認できている。 ・/d/（ダ行音）は弾音～破裂音 [r~d] で現れる。/r/（ラ行音）も歯茎弾音 [r] だが、これは破裂音になることはない。
	文法概説	<ul style="list-style-type: none"> ・琉球地域にみられる（主節）主格のガ／ノ交替は痕跡的にしか見られず、基本的に主格はガ（項目9、10など）、一部の自動詞文では無助詞で現れる（項目8など）。対格も無助詞であり（項目1など）、多くの琉球語同様、他動詞主格と一部の自動詞主格で助詞有り（ガ）、一部の自動詞主格と対格が無助詞という、分裂自動性がみられる。与格としては、標準語の「に」のもつ用法に、二、ネー、（一）チの3種類を用いる。「～になる」については、二を用い（項目5、10など）、目的地（向格）の場合は（一）チ（項目3、17、28など）、それ以外ではネーを用いる。 ・属格は又を用いるが（項目38）、人称代名詞＋所有物の場合は、助詞を介さずそのままその2つを並べる（項目44）。 ・主題にはヤを用いる。 ・「～てもらう」がなく、「～させる」相当形で自然に訳されることが多い（項目30）。 ・迷惑受け身がない（項目19）。 ・動詞の活用の型は、大まかに2種類（多段動詞および一段動詞）ある。他の北琉球語諸方言と同様基本形が歴史的にいわゆる融合形（連用語幹+un「居る」）由来、かつテ形由来の語幹もあり、多段動詞の語幹には語彙ごとにさまざまなパターンがある。 ・コピュラは、エン（項目35など）。 ・推量表現は、動詞推量形に当たる形（-ra 形）にパジをつける（項目8）。この -ra 形はパジなしの単独では用いない。

〔基本例文50〕 沖縄県国頭郡大宜味村津波方言訳

方言訳1 (もっともよく使う表現)	方言訳2 (使うこともある表現)	備考・コメント
1 ナマカラ ドウシネー ティガミ ハツ キュン。		
2 フデシ ティガミ ハツキュヌ ツーン ウイン。		
3 ヤーチ ヘーティカラ スグ ティガミ ハッチャン。		
4 ハッチャヌ ティガミ イクケーン ユ ミュン。		
5 ジュージニ ナリバ スグ ニンペー。		
6 ウカーハトウ ケンドーヤ アッキユナ ヨ。		ケンドーは、「県道」のこと。かつて 津波では道といえばスージと呼ばれる 小道もしくは県道で、スージは自動車 は通れなかった
7 フヌ ホンヤ タローネー トウラハ。		
8 ゴゴカラヤ アミ プイラパジ。		
9 ナッチーニ ナリバ ギンギチガ サツ キュン。		春にあたるものがないため (ウリズン もないとのこと)、「夏になれば月橋 が咲く」にしている
10 ハナコガ ヤー アキタートウ、ムシガ イッチチャン。		昔の家に窓はないため、「家 (の戸) をあけたら」に対応する表現になって いる
11 ヒティミティヤ テレビ ドウク ミヤ ン。		
12 ハナコヤ ウングトウヌ バングミヤ ミヤン。		
13 ハナコヤ キンヌー テレビ ミヤンタ ン。		
14 ハナコヤ テレビヤ ミヤングトウ ホン ビケー ユミュン。		「読んでいる」は逐語訳ではユドゥン になるが、文が具体的なイベントと言 うより性質 (ノ習慣) を示しているた め、ユミュンのほうが適している
15 テレビ ミヤンデー フヌ シグトウ クーンティ ウーワトウドゥー。		
16 ニチヌ アイヌ クワーネー クススイ ノマチャン。		
17 オッカーガ ウットウネー ユージーチ イカチャン。		
18 ウットウトウ オーティ ワンビケー オットーネー ヌラーリタン。		
19 ヤーネー ウーランバーネー ムン ヌス マリタン。		「入られた」の形は不自然なため、 「ものを盗まれた」としている
20 ウヌ クワーヤ ナマ グマハシガ ムチ カーハヌ カンジ ハツキュワスン。		
21 クーヤ ピンマガ アイトウ ウティチチ ティガミ ハツカリン。		ウティチチは、「落ち着いて」の意
22 ウヌ クワーヤ ナマ グマハトウ ヒラ ガナビケードウ ハツキュワスン。		「～しか～ない」対応形はなく、「～ ばかりぞ～する」対応形でその表す

23	ツクエガ ネットウ リッパニヤ ジー ハッカラン。		
24	タローヤ ナマ アマンティ ホン ユ ドゥン。		「隣の部屋」はあまり言わないため、 「むこうで」に変更
25	タローヤ ハナコカラ カッタヌ ホン ナー ウーワイマディ ユデーン。		
26	ナー フィン シラハヌ クマンティ ニ ンビバーハン。		「静かな」が出てこないため、「涼し いところ」とした
27	ヨーネーヤ ティントーガ アカーク ナ イン。		「夕焼け」がなく、「夕方で空が赤 い」だと少し不自然なため、「夕方は 空が赤くなる」にしている
28	ワラビ エータヌ バーヤ ドゥーツウイ ブルーチ イッキュシ インジャニ ウ トゥラーハタン。		
29	ウドントウカ スパエーレー ヤッサラパ ジ。		エーレーは、「であるなら」
30	フルホンヤネー ホン タカーク ホーラ チャン。		ホーラチャンは「買わせた」相当
31	ヤナ ワーチキ エートウ タルン ホ ン。		
32	ナー フィン ヤッサレー ホイワスタシ ガ。		
33	ドゥーツウ アシビーガ イジン ウムサ クネン。		
34	ワーチキガ マシ ナリバ イッカリン。		
35	タローヤ ナマ チューガクセー エン ドー。		
36	ワッターガ フーハイニーヤ センエン エーティン マギジン エータン。		フーハイはフーハン (小さい) の連体 形。他の形容詞と違い、～ノの形を取 らない。
37	フリヤ ヌスルガ アッチェーヌ アトウ エーラ パジ。		「足跡」が出てこないため、ここでは 「どろぼうが歩いた跡」としている。
38	フリヤ ワーハサ エーシガ、アリヤ セ ンセーヌ ハサ エン。	フリヤ ワーハサ、アリヤ セン セーヌ ハサ エン	「で」を入れようと思うと、「エーシ ガ (～だが)」をとするほうが自然
39	アッチャー イー ワーチキ エーラ、ワ ラピター ソーティ ダーガエーラーチ アシビーガ イッカ。		
40	フヌ ハサトウ クツヤ ワームンヤ ア ラン。		「クツ」はもともとないため標準語
41	A: アッチャー フマーチ キューユ。 B: イン、イッカーディ ウムトゥン。	B: イン、キューサ	「～と思っている」にそのまま対応す るのは訳1のイッカーディ ウムトゥ ンだが、これは「行こうと思ってい る」に対応する。「来る」は～ディ ウムトゥンでは使えないとのこと。方 言訳キューサについては、「来るよ」 が対応する訳である。

42	A:ヌーディチ ホンガ。キュンディ 'ユータセー。 B:ワーガワッサタン。イフィー ニチヌ アイン。		B:「体調が悪い」の対応表現がないので「少し熱がある」にしている
43	A:アマネー ウイシヤ タローエーガ ヤー。 B:イーイン、タローヤ アラン、ジロー アランガヤー。		
44	A:ドゥリガ 'ヤー ハサ エーガ。 B:フリガ ワー ハサ エンドー。		
45	A:フヌホン ユミュラー カラスン ドー。 B:ウヌホンヤ ナー ユダン。		
46	A:トゥナイヌ ヤーチ ヌスルガ イッ チャンディ。 B:アン エーユ。トゥナイチ イツチャ ラー ワッケーン ユージン サンデー ナランサ。		
47	A:アミ プイギヤハトウ ヤー クー トゥケー。 B:ナー クーテンドー。		伝統家屋には「窓」はないため、「家を閉める」という表現になっている
48	A:スバケーガ イッカ。 B:アラン、ウロンドウ マシ エン ドー。		ドゥはほぼル [ru] に聞こえるが、音韻的にドゥとかく。これに対するどんはウロン
49	A:イロハシヨテンディ 'ユーヌ ホンヤ ヤ ダーネー アイガ ワハユー。 B:ワハインドー アマネー カンバンガ アイサ。		「見える」という言い方がないので、「ある」になっている
50	A:ホンジョーウドンディ 'ユーシ カー タヌクトウ アユー。 B:イン、アインドー。アリヤ ジュンニ マーハンドーヤー。		ABともに「って」を提題には使わないため、Aでは「本荘うどんというもの」、Bでは「あれは」にしている。